
ホットニュース(平成14年度／第57号)

●今月の業界ホットニュース／雪国の道づくり

先週久し振りに雪の上越市を訪れた。さすがに名にし負う豪雪地帯で、市街地でも早くも20センチ程の積雪である。

当然道路は除雪してあるが、道路の除雪とは車道の除雪である。車道の雪は歩道側に除雪され、歩道を歩くことができない。歩行者も自転車も、狭くなった車道の隅を通行せざるを得ないという状況である。もちろん、歩行者や自転車利用者は、交通弱者といわれる高齢者や子供達で、とくに降雪中に傘を差して自転車に乗っている高齢者をみると、危険極まりないという感じである。実際に事故率も高くなるそうである。各地で交通バリアフリーの話が進められているが、雪国の道路事情は健常者でも歩けないということが実感される。

上越市の高田地区は、古くから豪雪と雁木の街として有名である。各家が雁木空間を提供し、雪を克服する、人に優しい道づくりを伝えてきたものである。雪深い都市が雁木文化を育てたともいえよう。ところが文明の利器、車の普及とともに、車依存の生活を当然のこととし、車優先の除雪政策すなわち冬季の道路政策となり、先述のような危険な状況を創り出している。

雁木で雪を克服したように、冬季道路対策の新たな知恵が必要ではないだろうか。

(代表取締役 堀田 紘之)

●交通需要マネジメント(TDM)の今後

交通需要マネジメント(以下、TDM)は、道路・鉄道といった交通インフラ整備ではなくて、主として交通需要をコントロールすることにより、都市全体として最適な交通状況を実現するために、交通需要の発着点、発生日時、利用手段、利用経路、その他を誘導する施策である。パークアンドライド、オフピーク通勤、共同集配など取り組まれているが、混雑緩和など、目に見えるほどまでの効果が現れていないのが実情ではないだろうか。

しかし、今後、長期的に市民の良質なモビリティを確保していくためには、以下の理由から、TDMは一層の重要性をもつことになると思う。

1)少子高齢社会、安定経済成長社会では、財政余力は小さくなり、しかも既存インフラの維持コストが大きくなることから、TDMにより既存インフラを活用していくのが合理的である。

2)長期的に交通需要は頭打ちになるとしても、高齢者のモビリティを確保するために公共交通ネットワークを維持する必要があり、需要創出に力点を置いたTDMが必要になる可能性がある。

ところで、来年の2月17日(月)から、英国ロンドンで混雑課金が開始される。ロンドンの混雑課金が市民・事業者に歓迎され定着するかは、今後のTDMの方向性を占う試金石になるかもしれない。ロードプライシングといった経済的あるいは法的に交通需要をコントロールしていくタイプのTDMが受け入れられるとすると、短中期的に世界の大都市での導入も現実味を帯びてくることになろうし、受け入れられないとすると、コンパクトシティといった良質なモビリティを確保するための都市構造の形成、

土地利用の規制・誘導といったやや長期的な政策に力点が置かれることになる可能性がある。

(交通計画部 矢島 充郎)

●一眼望三国・琿春市

中国において2001年の最も早い日の出は、中国東北部に位置する琿春市であった。当市はロシアと北朝鮮との国境都市でもあり、三国を一望できる観光地・防川を擁する。

縁あって12月8日から昨日15日まで琿春市を訪れた。目的は琿春都市計画に対して専門的立場からの技術供与であった。本業務のクライアントは新潟県上越市であり、総合開発研究機構(NIRA)からの補助金を受けている。琿春市と上越市は姉妹都市である。両市は平成6年から国際交流事業を行い、これまでは経済や文化、教育部門が中心であったが、今回は琿春市からの要望で、都市計画部門における技術交流の第一弾である。

ところで琿春市の現代都市づくりは、文化大革命の煽りをもろに受け1970年代から約20年は完全に停滞

し、都市建設が始まったのは実質的には1993年からである。そして10年。今の琿春市は中国の中級レベルの都市インフラを抱えるまで成長した。日本の戦後復興都市づくりを絵にかいてような様相であった。都市の急成長に都市計画がどのような役割を果たすべきか。この回答を次回派遣時の2月までに用意しなければならない。

(都市計画部長 高尾 利文)

●青年海外協力隊レポートvol.18

～モロッコの民芸品4・裏も表もございません！ー刺繍

『民芸品』というイメージとは少し違うものの、モロッコの刺繍は素晴らしい。ちょっと見たただと普通のクロスステッチの刺繍なのだが、これが表も裏も同じ模様となっているのだ。そして、糸の始めも終わりも巧みに隠して、どこから刺し始めたのかもわからないようになっている。また、生地縦糸と横糸の目の数を数えながら複雑な柄に仕上げられている。白地にこげ茶、または緑、青などが伝統的な色使いだ、最近では、色のついた生地を使ったり、刺繍糸の色を変えたり、糸の色のグラデーションをうまく使ったりと、バリエーションが豊かになってきているようだ。

年に2回、首都ラバトでこの刺繍の展示会が開かれる。主に、メクネス、ミデルト、マラケシュなどからの出展だ。ミデルトは修道院から、メクネス、マラケシュは個人の店からの出展である。店と言っても、表に大きく看板を出しているのではなく、住宅街の中の普通の家の一室で、ストックを見せてもらえるという形式である。中でもマラケシュの店は、作り手のグループを組織し、周辺各村まで刺繍指導に出かけて作品を集めており、目の細かさといい色使いのきれいさといい、モロッコの品質を誇っていると思われる。

もともとは、結婚の時の持参品としてテーブルクロスやコースターなどを、白の木綿布やオーガンジーなどで作っていたようで、モロッコ人の家でもよく見かける。が、これらの店では、主に外国人が顧客となっているようである。これもまた、絨毯と同じく女性たちの労働に対する対価がそのまま値段に反映されているが、全く惜しくない作品ばかりである。

(都市計画部 酒井 夕子)

アルメックホットニュース(平成14年12月15日発行)

////////////////////